

『顯揚聖教論』に見られる極微説

早 島 理

一 『瑜伽論』について「今当錯綜地中要」とされる『顯揚論』は「摂淨義品」第二、「成無常品」第四、「摂勝決択品」第十一などで極微について論及している。そのうち「摂淨義品」は「復次計諸極微常住論者 我今問汝 隨汝意答」として極微説を展開するが (vol. 10, 526 a-c), それに先立って卷九冒頭に「異論多種者 謂十六種異論 何等十六 嚧柁南曰」(521b) として、嚧柁南を引用して十六種の異論を紹介する。この十六種異論中「第五計常論」の一つに「極微常住論」が説かれているのである。嚧柁南曰とあるように、これは同論書本来の偈頌ではなく、周知のように『瑜伽論』「本地分中有尋有伺等三地」からの引用である。両者を比較検討すれば明らかなように、「摂淨義品」の極微説は『瑜伽論』のそれ (*Yogācarabhami* YBh pp. 140-141) を継承していると考えられる。その意味でこの極微説は『顯揚論』独自のものとは見なし難く、十六種の異論の一つとして要約・継承されてきた極微説を『顯揚論』が(あるいは『瑜伽論』それ自体も)受け継いでいると云えよう。さらにこの極微説の展開が、対論者の主張する「極微常住論」を、次の五種の視点から考察し、否定する仕方で行なわれていることも既に良く知られている(次の(1)~(5)の区分が後出「摂淨義品」極微説科門の(1)~(5)に対応することに留意されたい)。

[1] (1)parikṣāparikṣaṇato 'pi, (2)sāmānyalakṣaṇato 'pi, (3)mūlalakṣaṇato 'pi, (4)ārambhato 'pi, (5)mūlaprayojanato 'pi, paramāṇunitatvavādo 'pi na yujyate/tasmād eṣo 'pi vādo 'yogavihitāḥ/(YBh p. 142)

又(1)由觀察・不觀察故,(2)由共相故,(3)由自相故,(4)由起造故,(5)根本所用故,極微常論不應道理。是故計常論者非如理説。(「有尋有伺等三地」308c)=攝淨義品」526bc)。

さて次に「成無常品」では以下のように極微が論じられている。

[2] 復次計極微常不應道理,何以故,頌曰

常造不應理 由二三因故 財有情増上 極微非常住 (ka.17)

論曰 所計極微常性造作俱不應理。云何常性不應道理。由二因故。

1) 汝極微性(1)為由細故性是常住。(2)為由異類性是常耶。

(1)若由細者 細羸劣故不應常住。(2)若由異類者 此相不可得。從非地等造地等物不應道理。

2) 云何造作不應道理。由三因故。一由方所。二由因緣。三由自體。

(1)云何由方所故造作不應道理。謂從極微造作麤物。②為過彼量。①為不過耶。

① 若不過者 麤質礙物應如極微不可執取。又復世間不見質礙不明淨物同在一處故不應理。

② 若過彼量者 過量之處麤質礙物非極微成應是常住。若復計有餘極微生 是則極微應非常住。

(2)云何由因緣故。謂若汝計由和合性為因緣故建立餘物令和合者 此和合性 ①為生已能作因緣 ②為未生耶。

① 若生已者 所和合物和合已後無有少異和合性可得故不應理。

② 若未生者 則無體性無體為因不應道理。

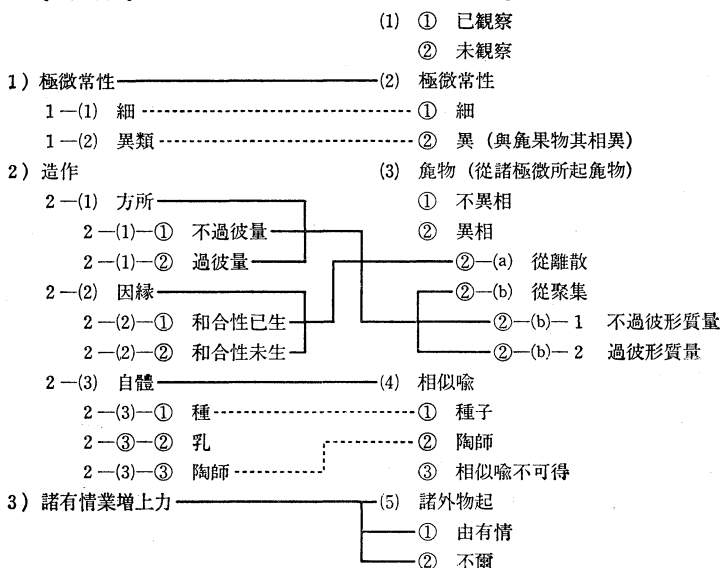
(3)云何由自體故。此極微性造麤物時 ①不應如種生芽如種極微應滅壞故。②不應如乳極微應變異故。③不應如陶師極微勤劬不可得故。是故造作不應道理。

3) 雖無常住極微而有劫初器世間等受用物生諸有情業增上力故不由極微 是故極微常住不應道理。(「成無常品」550ab)

№ 9

【成無常品】

【攝淨義品】



「成無常品」の極微説は偈頌に要約されているように、1)極微の常住性の不合理さを二種の因により指摘し、続いて2)極微の造形性の矛盾を三種の因の視点から論及する (kā. 17ab)。その上で3)物質と衆生の業との関係を説示して (kā. 17c)、結論として極微の常住性を論破するのである (kā. 17d)。今は個々に比較検討する暇を持ち合わせないが、「摂淨義品」の極微説（ここでは科門のみを揚げる）と「成無常品」のそれとは、前頁のような対応関係にあると考えられる。

この対応関係から明らかなように「成無常品」の極微説は「摂淨義品」のそれとほぼ全般に涉って合致している。すなわち「成無常品」の極微説も、その論述項目からすれば『瑜伽論』における「十六種異論」中の「極微常住論」をほぼ受け継いでいると云えよう。

二 『瑜伽論』や『顯揚論』の極微説は、いずれもその冒頭の命題提示や結論から明らかなように、極微の常住性の否定をその最終目的とする ([1] paramāṇu-nityatvavādo 'pi na yujyate/, 「極微常論不應道理」, [2] 「復次計極微常不應道理」, 「是故極微常住不應道理」)。つまりこれらの「極微説批判」は、極微は常住なのか無常なのかの議論をその内容とする極微「常住説」批判なのである。その意味でこの極微説は、有部や經量部あるいは後代の諸論書に見られるような、認識の対象となるのは極微の全体性なのか、極微の集合体なのか、あるいは極微の結合体なのかと云った、極微「形状説」批判とはその意図を異にするのである。いわば極微を存在のレベルで批判するのが『瑜伽論』・『顯揚論』の極微説批判であり、他方、知覚・認識レベルでの批判が後者であると云えよう。云うまでもなくその内容を一瞥すれば明らかなように、『顯揚論』なども極微の全体性、集合体、結合体と云った議論をこと細かに論じている。ただその議論が知覚・認識のレベルでの、極微のあり方の批判・否定ではなく、あくまで極微の常住性の批判・否定にあることに留意すべきであろう。

なお有部や經量部などが知覚・認識レベルで極微を論じる時の (1) 極微の全体性、(2) 極微の集合体、あるいは (3) 極微の結合体と云うテーマ (『唯識二十論』kā. 11以下参照) は上記『瑜伽論』や『顯揚論』の極微説に類似のものがほぼ見いだされる (上掲対応表参照)。つまり、極微を論じる視点としてある要約された共通のテーマがあり、それを前者はこれら三種にまとめて知覚・認識の視点から論じた。他方後者は存在のレベルで、『瑜伽論』は五種、『顯揚論』「成無常品」は三種の論点からそれぞれ極微説を展開したことになる。これら両者の関係については稿を改めねばならない。

このように『瑜伽論』や『顯揚論』が極微の常住性の批判・否定にその論議の重点を置かざるを得なかった背景は次のように説かれている。

[3] さらに極微が常住であると考え人々は、世間的な三昧に依存してかく理解するのであり、[それは] 如実に縁起を了知していないからである。[彼らは、] 存在するあれこれのものには、存在[性すなわち極微]が先ず[原因として]有り、[それにより]結果[である龐大な物]が集起するのであり、[集起した存在性すなわち極微が]先ず離散することにより[あれこれの存在物は]消滅すると構想して、[極微は常住であると]かく考えるのである。[つまり彼らの理解はこうである。]極微から龐大なものが生じる。龐大なものは分析されて極微の状態になる。それ故龐大なものは無常であるが、極微[それ自身]は常住である。(YBh p.138,)

又計極微是常住者 以依世間靜慮起如是見 由不如実知縁起故。而計有為先有果集起離散為先有果壞滅 由此因縁 彼謂從衆微性麤物果生 漸析麤物乃至微住。是故麤物無常 極微是常。(「有尋有伺等三地」307c「攝淨義品」525c)

世尊が最後の言葉として「では比丘たちよ。汝たちに告げよう。もろもろの現象は移ろいゆく。怠らず、努めるがよい。」(*Maha-parinibbāna-suttanta* 6.7, *Dīgha Nikāya* vol.2, p.156)と述べられたとき、この現象世界のものはすべて移ろいゆくものであり、無常であることをはっきりと説示されたはずである。しかし、この『瑜伽論』の論議は、その当時に縁起をありのままに理解できず、現象世界のうち或るもの(麤物)は無常であるが、或るもの(極微)は常住であるという異論が跋扈していたことを物語っている。このような異論を否定・論破し、「諸行無常」を再度立証せんがために両論書で常住論批判が展開されているのである。そしてその一翼を占めるものとしてこの極微説批判が論じられていると見なすべきであろう。

三 本来無常であるにもかかわらず常住として執される極微について、『瑜伽論』が極微の集合や和合の考えを否定した後で、

[4] 分別作用 (buddhi) により、分量の極限まで分析することによって、極微が概念設定されるのである (prajñāpyate)。 (YBh p.53)

但由覺慧分析諸色極量邊際分別假立以為極微。(『瑜伽論』本地分中「意地」290a)と述べていることは注目に値する。極微に関する同様な論述は同じく「摂決摂分中意地」においても再度現れる(由極微體以慧分析而建立故。vol.54, 598a)。このように極微とは実在ではなく、分別作用により概念設定されたものであるとする立場からすれば、極微は常住であると執するのも分別作用による誤った概念設定に他ならなくなる。基本的に極微をこのように把握する考え方は、『瑜伽論』の

みならず瑜伽行派に独自のものであると思われる。事実『顯揚論』『成無常品』は『瑜伽論』におけるこのような考え方を継承しただけではなく、さらに三性説をその基盤に導入し、新たな極微説を展開して行くのである。

この「成無常品」の全体を鳥瞰するに、四聖諦の苦諦を観じて「無常・苦・空・無我を遍知する」ことを大棒とし、先ずあらゆる存在の「無常」なることを「利那滅」を中心に論じる。そして極微説批判は、他の自我説や自在・自性説批判とともに、「一切外道邪分別」批判の一部として、無常論の一端を展開しているのである。その場合に 1) 無常を利那滅の視点から論じていること、すなわち「諸行無常」を「諸行利那滅」として立証すること、2) 及びこの命題を立証する理論的根拠として三性説を導入していることにその大きな特色が有ると云えよう。『顯揚論』のみならず、初期の瑜伽行派の利那滅論が三性説に立脚していることは既にその一部を論じたことがあり（拙稿「無常と利那」、『南都仏教』vol.59）その詳細な論証は今は省略する。ここでは極微説を三性説の視点から略述するに止める。

無常とは利那滅であることを立証し、同品はそれが三性説に依拠することを次のように説く。

[5] 頌曰

無性義無常 遍計之所執 所餘無常義 依他起應知 (kā.5)

論曰 無性義所攝無常義、應知遍計所執相攝、餘無常義依他起相攝、圓成實相中無無常義。如是已顯無常義差別及三相所攝。(「成無常品」vol.14,548c)

この偈頌は極めて難解であるが、同品 kā. 2、『中辺論』第Ⅲ章 kās. 5cd-6ab、あるいは『莊嚴經論』第ⅩⅧ章 kā. 81 等を重ね合わせると次のようになる。ここでは『中辺論』のみを引用する。

[6] 無常なること (anityatā) などが、その「三性説の」上に、どのように理解されるべきか。

無常の意味は、まことに実在でないという意味であり、生じては滅する相のあるものであり、また、垢れをとまうと垢れがないとのあり方をもつものとして、根本の真実の上に順次見られる。(MAV Ⅲ-5cd~6ab)

根本の真実とは、いうまでもなく三自性であるが、それらにもとづいて、順次無常の意味は「三種で」ある。すなわち、[遍計所執性に関しては]「実在でない」という意味であり、[依他起性に関しては利那ごとに]「生じては滅する」という意味であり、[圓成実性に関してはみずからが無常なのではなく、外からの夾雑によって]「垢れをとまう」ものであり、[それ自身は]「垢れがない」ものであるという意味である。

(MAV pp.38-39, cf. MAVT pp.116-117)

(1)無常とは依他起性からすれば瞬時に生じては滅する刹那滅である。(2)しかし我々凡夫には本来の刹那滅の世界は、常に何か持続性のあるもの、あるいは常住なるものとしてしか顕現してこない。これが遍計所執性の世界である。(3)このように持続性のあるもの、あるいは常住なるものとして構想され、遍計執された世界は、真実には何等存在しない。遍計所執性に関して、「無性義無常」(絶対的非存在の無常;「成無常品」)とか、「実在でないという意味である」(『中辺論』)などと説かれるのはこのためである。(4)重要なことは、そのように持続的あるいは常住なものとして世界を認識するのは、我々が何か意図してあるいは誤って理解するから、たまたまそのようになるのでは決してない。我々が認識したその瞬間に、世界はそのままそのように現われて来ることである。三性説において「依他起性は転換的に常に遍計的なあり方へ向かって墮落する傾斜をもっている」(長尾「唯識義の基盤としての三性説」)と説かれる所以である。

かような三性説を基盤とする無常への深い洞察に依拠して、『顯揚論』の極微説は説かれているのである。何か持続性のある常住なるものとして極微を構想し、遍計執するのは我々が遍計所執性の世界に埋没しているからに他ならない。同論書における極微常住説の超克は、単に極微への正しい理解のみに止まらず、「諸行無常」の、そして「苦諦」の観察を経て「四聖諦」を体得する、換言すれば円成実性の世界に悟入する第一歩なのである。

さらに極微について、『集論』が「極微は本体の無いものであり……,分別作用(buddhi)により〔存在物を〕極限まで分析して、極微の〔概念〕設定(paramāṇuvyavasthāna)がなされる。」(Gokhale, 31-8)と説き、『雜集論』がこれに註して「本体が無いにもかかわらず、極微が〔概念〕設定される……のは、……人無我への悟入……と法無我への悟入が適うのである。」(N. Tatia, § 57B)と論じたり、あるいは後代に Kamalaśīla が *Tattvasaṃgraha* に註して「分別作用(buddhi)が極微という迷乱の根拠(nibandhana)である。」(TSP 681-10~11)と云うとき、『唯識二十論』などのみならず、上述の『瑜伽論』、『顯揚論』「成無常品」に展開されている極微に対する深い思索を思い起こす必要があることの指摘のみを、ここではしておきたい。(紙面の制約上割註以外は割愛した)

<キーワード> 極微説,『顯揚論』「成無常品」,三性説

(長崎大学助教授)